

神と仏のよもやま話

星が降ってきそうなくらいに空気が澄んだ冬至の夜。長野県上田市にある信濃国分寺の三重塔のふもとに、四匹の猫が集まっていた。実は彼らは、信濃国分寺の薬師如来、生島足島神社いくしまたるしまの生島大神と足島大神、そして安楽寺の大日如来が猫に姿を変えたものだった。

四匹、もとい、四神仏は夏至と冬至に太陽の光がたなぐレイライン上にある神社仏閣の祭祀で、「近所のよしみで仲が良いのだ。彼らは、あるときは猫、あるときはカラス、あるときは日向ぼっこをする亀などの姿になって夏至と冬至の日に必ず集まっては、近況報告をしているのである。」この日は、神在月で出雲まで二カ月の旅に出ていた生島大神と足島大神が上田に帰ってきてから行う、定例冬至ミーティングだった。

「おー、おかえり。生ちゃん、足ちゃん。どうだったよ？ 出雲？」

黒猫に化けた薬師如来が、三毛猫と茶トラの姿で近づいてきた生島大神、足島大神に声をかける。

「毎年のこととはいえ、まあまあ遠いよね。これ、何千年ってやってるけど、慣れないよね」と、三毛猫姿の生島大神。

「そんなこと言うな。呼んでもらえるだけありがたいやろが。足を知れや、足を」と、茶トラ姿の足島大神。

「で？ で？ 今年はどんなこと話したの？ 教えてよー、教えてよー」と、白猫に化けた大日如来。

「毎年同じよ。人間から持ち寄せられた悩みをこんな風にして解決してあげたよっていう報告会だから。ただ、最近の傾向としては、量よりも質が評価されんのよ。ほら、やっぱ地方の神社だとさ、そもそも参拝する人少ないじゃん」と生島大神が答えると、

「なんか最近、Mーみたになってんねん。予選あつて、決勝では点数つけられて講評とかされんねんで。まあエンタメ要素はあつて面白いねんけどな」と、足島大神。

「んで、ふたりはどんな報告したの？」と、薬師如来が聞くと、「私はさ…」と、生島大神が話し始めた。

「人気者になりたいー」

ある夏の日。生島足島神社に一人の若い男がやってきた。男の名は、美月幸徳。春先に「自分が本当にやりたいことを仕事にしたい！」と、大学卒業後に三年間勤めた会社を辞めて

YouTuberとなった。実家暮らしで親を頼れるのも、幸徳の背中を押した。

最初は、常日頃からプレイしているゲームの実況を試みた。数本アップしたが、まったく再生数が伸びない。

「それでは」と、多少ルックスに自信のあった幸徳は、別チャンネルでモーニングルーティンなどのライフスタイルを紹介したところ、「モデルでもないのに、何を勘違いしているんだ、コイツは」など、辛辣な言葉でコメント欄が埋め尽くされた。

「勘違いなんかしてねーよ。俺はただのニートだ。クソ」

それでもへこたれない幸徳は、また別チャンネルをつくって、今度は人気飲食店をレビューすることにした。だが、当然無名で登録者数も数百人のチャンネルでは、人気店が取材に応じてくれない。

「どうすりゃいいんだよ…」

そうつぶやいた幸徳に、母親がこう言った。

「私ね、若いころに長野県の上田市っていうところに行ったことがあるのよ。そこに生島足島神社っていう神社があって、私はそこで願いを叶えてもらったの。生島大神は、万物を生み育てる神さまだっていうから、あんたの動画のアイデアも生んでくださるかもよ」

「ふーん…」

その場ではそっけない返事をした幸徳だったが、すぐにスマホを取り出して上田行きの新幹線を予約して東京の自宅を飛び出し、神頼みの旅へと出発した。

生島足島神社に到着した幸徳は、早速神さまにお願いをした。

「お願いします。俺、これ以上何をやったらいいのかわかりません。自分の好きなことをするために会社辞めたのに、今すごく苦しいです。こんななら、会社辞めなきゃよかったって思っています」

そんな幸徳に、生島大神はヒントを与えた。

「原点に戻れ」

もちろん、幸徳に生島大神の言葉など聞かせるはずもないのだが、幸徳は木々のざわめきに何かを閃いたのか「家、帰ろう」と独り言ちて、神社を後にした。

家に帰った幸徳は、おもむろにキッチンに立ち、カメラを回しながら、料理を始めた。母子家庭で育った幸徳は、子どものころからキッチンに立って母と一緒に料理をしていた。お金はなかったが、母親が冷蔵庫にある材料だけでつくってくれる奇跡のような一品は、彼の血となり肉となり、絶対的な舌を育んだ。

ブログが一般的になってきたころから、母親は節約しながらつくるおいしい家庭料理のレシピをネットで公開し始めた。彼女としては備忘録程度のものであったのだが、それが注目されメディアなどでも取り上げられるようになる。母親は「その名の知られる料理研究家となった」

「母ちゃんに教えてもらった」をやってみよう」

幸徳は、また新たなチャンネルを開設した。その名も「yukidish」。実家の清潔感のある広々し

—お母さんを助けて—

井上芳子の毎朝の日課は、愛犬のラッキーを散歩に連れていき、その途中で信濃国分寺に立ち寄って家族の健康と安全を願うことだった。お賽銭は毎日五円。「五円ボックス」という名の貯金箱をリビングのテーブルの上に置いて、自分の財布からはもちろん家族からも五円玉を集めていた。

ある夏の朝、芳子は脇腹のあたりがキリキリと痛むのを感じた。食べるのが何よりの楽しみのはずが、「最近、食欲もない。しかし、彼女の日常は続いており、変わらずラッキーを連れて信濃国分寺へお参りする。

「おはようございます、薬師如来さま。今日も家族が健康で平和でありますように」

芳子はそう言って境内を去ろうとする。もう見ていられなくなった薬師如来は、彼女にシヨックを起すことにした。

「これなら病院に行つて検査を受けてくれるだろう。今なら助かるから！ 頼む！」

あまりの痛みにもその場で倒れた芳子は、住職の「大丈夫ですか？」の言葉に我に返り、「大丈夫です！ 大丈夫です！ ごめんなさいね」と痛みにゆがんだ笑顔を残して、その場を後にした。

そしてその日が、芳子が信濃国分寺を訪ねた最後の日となった。

「薬師如来さま、お願いします。お母さんを助けて下さい！」

芳子によく似た中学生くらいの少年が、ある日信濃国分寺に現れた。

「お母さんは、毎日ここに来ていたでしょう？ 毎日お賽銭を入れていたでしょう？ だったら、その分くらいは助けてください。僕のお母さんは癌になってしまいました。胆管癌っていう癌で、お医者さんの話ではもう手術もできないって…。お父さんは僕とお姉ちゃんに『覚悟しよう』なんて言ったけど、僕は嫌だ。お母さんの体調の変化に気づけなかった僕たち家族も悪いけど、薬師如来さまなのに、お母さんの身体の不調に気づいてくれなかったんですか？ そんなんで仏さまって見えるの？ せめて、僕が大人になるまでお母さんが生きられるようにしてよ！！ 僕だって『五円ボックス』に五円玉入れてたんだから、お願いする権利はあるはずでしょう！」

少年の悲痛な叫びに、薬師如来はなんともいえない気持ちになった。

「で、その後どうなったの？」と、大日如来。

「彼女は亡くなったよ。いくら仏だつてさ、やれる」とかやれないことがあんだよ。自分、めっちゃヒント出してたんだよね。彼女の身体の異変には、誰よりも先に気づいてたしさ。彼女が料理しながら見ていたテレビ番組で胆管癌についての情報が流れたときは、目が行くように促したし。それができるだけ健康な状態が続くようにめっちゃ力使ったからね。いやマジで、

「切ないな」と、生島大神がため息をつく。

「でもさ、少年、来てくれたんだよね。『お母さんは死んじゃったけど、最期は仏さまのように穏やかな顔でした。お母さんの手には、ニコニコのお守りが握られていました』って」

「うわ…泣ける」と、大日如来。

「だからさ、自分、もうひと仕事したわけ。上にかけてあって、少年と彼女を会えるように手配したんだよね」

「お、やるじゃん。で、どうなったの?」と、生島大神。

「少年の前に自分みたいな真つ黒な子猫として遣わせてくれたみたい。子猫は拾われたよ。その女性の名前にちなんで、よっちゃんって名前になったんだって。今は家族全員にかわいがられてよっちゃんも幸せそうだよ。そして何よりさ、彼女の願いだった家族みんなの健康はずっと守っていつてあげるつもりよ。これからも」

「神とか仏ってのはさ、何気なくヒントを送ってるもんなんだよな。それに気づいてくれるか、素直に行動に移してくれるかは、あくまで人間次第なんだよね」と、生島大神が応じると、

「でも本当、少年、よかったじゃん。お母さんだと気づいてなくても、そしてその猫ちゃんともいつかはお別れすることになるけどさ、何かの形で縁はずっとつながっていくんだよな。『袖振り合うも多生の縁』ってことだ。ところで…、足ちゃんはなんかないの?」と、大日如来が足島大神に問いかける。

「いや、ワシんとこもよ…」と、足島大神が口を開く。

—東京じゃないんだ—

陽ノ宮碧は、上田市の高校を卒業し、東京の大学に通う女子大生だった。全国的にも名の知れた大学に入学し、地元では英雄扱い。高校の同級生や先生、親戚や近所の人たちまでも「碧ちゃん、すごいねえ」「さすが、上田のホープ」と、会う人会う人が褒めはやしてくれた。

碧は、高校時代もクラス委員を担当し、優等生ではあるけれどユーモアもあって、自他ともに認める人気者だった。東京の大学でも高校時代と同じようにクラスメートに一目置かれ、受験を気にせずに大好きな語学の勉強に打ち込めるのだと信じていた。そして、今どきのイケてる友達と誰もがうらやむようなボーイフレンドとのキラキラした生活が待っていると信じていた。

しかし、東京の大学に入ってみると、自分よりも頭のいい学生は山ほどいて、小さい時から「かわいい」と褒められていた外見もさほどではないことに気づいた。奨学金を借りながら、生活費を賄う必要があった碧は、せめて「東京っぽい場所」でアルバイトをしようと、渋谷のカフェで働くことになった。

アルバイト先には、碧では手の出ないようなブランド品に身を包んだ老若男女が出入りする。同世代の客に対して羨ましいという気持ちがないかといえば嘘だった。そして、同級生がSNSで数千円もするケーキを食べる様子や海外旅行に出かける様子をアップするたび、碧は必要な敗北感に苛まれるのだった。

「なんか違う。こんな思いをするために、東京に来たんじゃないんだけどなあ」

ある年の夏、帰省した碧は、「お宮参りから七五三、初詣に合格祈願と、ことあることに訪れた生島足島神社を訪れた。

「神さま。私、東京での生活が楽しくないです。もっとうまくやっていけると思ったんだけどなあ。友達はいるにはいるんですけど、東京出身のキラキラしたクラスメートとはちよつと違う感じ。私、あつちの方に行けると思ってたんだけどな。高校時代とは全然立ち位置が違ふんです。やっぱり私には東京は身分不相応だったのかな…」

足島大神は、碧にある啓示を与えた。

「あなたは十分に持っている。あなたは、あなたが輝ける場所でキラキラしたらよい」

深い緑色を讃えた木々の上でぎらつく太陽と、その光を受けて輝く境内の神池に、碧は何かを感じた。

「別に、東京じゃなくても、いっか」

その日碧は、「将来は地元に戻ってこよう」と決心した。地元に戻ってくるために最善の選択肢を考え、碧は公務員試験の勉強をはじめた。上田市役所の職員になるべく、地元の歴史や神社仏閣、人々の生活についてもリサーチを始めた。

そしてめでたく市役所職員としての採用が決まり、碧は国のプロジェクトにかかわる部署に配属された。歴史や地域のストーリーを紡ぎ、地域活性に繋げるのが、碧のその部署での仕事だった。アイデアを求められた碧は、学生時代にリサーチしたことや、祖父母や高校時代の恩師などから聞いて練り上げたストーリーをプレゼンテーションすることにした。

「別所温泉、生島足島神社、信濃国分寺は、直線状につながれています。夏至と冬至にはこの直線を太陽の光が照らし、レイラインとなります。これって、すごく神秘的なことだと思っし、重要な意味を持っていると思います。それに雨こいや龍神さまのことも併せて、パワースポットのな感じにできないでしょうか？」このことをもつとアピールすれば、上田を聖地巡礼の場所にできると思っんです」

「ん、その後どうなったの？」と、大日如来が問う。

「彼女のアイデアは採用されて、なんやだんだん盛り上がりすぎてくるらしいわ。しかも、オリジナルのキラクターまでつくって、地元のVチューバーとコラボしているいる楽しく仕事してるってよ。大学時代に憧れてた一目置かれる存在をバーチャルの世界で楽しんでるっちゅーわけや」

「レイラインねー。やーつと気づいて言葉にしてくれる人が現れたか。昔の人たちの祈りが、現代の言葉にようやくなったんだね。それもあつて、最近人が増えたんだ。納得ー」と、大日如来が言っ。

「ちゃんとさ、受け取ってくれたら何とかなんだよな」と、薬師如来がポツリとこぼす。

「本当、にっちもさっちもいなくなる前に来てほしいよね」と、生島大神。

「つか、毎回」の結論よな。人間は業が深いで」と、足島大神。

四神仏の間に、神妙な空気が流れる。
その空気を破るように、大日如来が口を開いた。
「そういえば、ウチもこないださ……」

……のお話の続きは、またの機会に。